

## 17. RIA による血中 TBG の測定

—T<sub>3</sub> レジン摂取率との関係について

中川 毅 川原田和子  
田口 光雄  
(三大・放)  
信田 憲行  
(同・病院中放)

TBG-I-125 kit を用いた TBG の radioimmunoassay を行ない、その臨床的価値を検討した。14 例の正常人の測定値は  $19.0 \pm 3.0 \mu\text{g/ml}$  に分布した。甲状腺機能亢進症では、ほぼ正常域に分布し甲状腺機能低下症は有意の高値を示した。橋本病では低値から高値に広く分布し、妊婦では著しい高値を示した。ネフローゼ症候群では低値の傾向がみられ、1 例の TBG 減少症では  $1 \mu\text{g/ml}$  と著しい低値を示した。濾紙電気泳動で測定した TBG capacity との間には、 $r=0.91$  なる良好な相関がみられた。T<sub>4</sub>/TBG 濃度を free T<sub>4</sub> index として用いた場合、平衡透析により測定した free T<sub>4</sub> 濃度との間に  $r=0.92$  なる良好な相関が認められたが、妊婦、甲状腺機能亢進症などで index が低値を示す傾向がみられた。Free T<sub>4</sub> index として T<sub>4</sub>/Res-o-Mat T<sub>3</sub> を用いた場合には、 $r=0.98$  なるよりよい相関が認められた。TBG の測定は、ホルモン結合に関する病態生理の解明には有益であるが、free T<sub>4</sub> index には T<sub>3</sub> uptake を用いるのが適当と考えられた。

18. <sup>99m</sup>Tc-MDP によるリンパ系スキャンについて

小林 英敏 仙田 宏平  
佐々木常雄 松原 一仁  
改井 修 石口 恒男  
真下 伸一 大野 昌子  
三島 厚  
(名大・放)

RI によるリンパ系シンチの 1 方法として <sup>99m</sup>Tc-MDP を試みた。<sup>99m</sup>Tc-MDP を両足背に皮下注射したところ、RI が下肢リンパ管内を上行し、

体循環に入るのが観察でき、鼠径リンパ節も描出された。<sup>99m</sup>Tc-phytate によるリンパ節シンチと比較すると、リンパ節の描出は劣るが、リンパ管の描出は優れていることがわかった。<sup>99m</sup>Tc-MDP を皮下注射した被験者と、静脈注射した被験者の尿をそれぞれペーパークロマト法により比較したが、差異は認められなかった。皮下注射した局所の RI カウントの減少を検討したが、減少率は片対数グラフ上直線的に減少せず、2 相性であることがわかった。

## 19. 肝シンチ上肝左葉の萎縮を示した症例の検討

安田 鋭介 金森 勇雄  
木村 得次 市川 秀男  
(大垣市民・特殊放射線センター)  
中野 哲 綿引 元  
武田 功 北村 公男  
(同・2 内)  
佐々木常雄  
(名大・放)

肝シンチ上肝左葉の萎縮を示した症例（左葉径 5 cm 未満）は過去 1 年 3 カ月間の 1,616 例中 30 例約 2 % にみられた。内訳は、肝機能障害 4 例 (13 %), 肝硬変症 12 例 (40 %), 各種悪性疾患 14 例 (47 %) であった。左葉の形により、3 つのタイプに分類でき、縦軸のみ萎縮を示す型が 50 % を占めていたが、疾患別には一定の傾向を示さなかった。さらに、これらの症例について、肝右葉、脾描出を疾患別に比較検討した。肝右葉萎縮 (10 cm 以下) 合併例は、肝硬変症の 6/12 例 (50 %) にみられ、さらに、その 4/6 例は脾腫も伴った非代償性肝硬変であった。ここに左葉萎縮例での肝硬変症とそのほかの疾患との分類がある程度可能と思われた。なお、左葉萎縮例の年齢分布は、悪性疾患例に高齢者が多く、65 歳以上の 11/13 例 (85 %) を悪性疾患が占めていた。左葉萎縮の原因として疾患以外に年齢を考慮する必要があると思われた。肝左葉萎縮の原因は、今回は、はっきりしなかったが、今後 <sup>99m</sup>Tc-PI, ERCP, CT, Angio など諸検査を施行